



Data

監督：スティーヴン・ダルドリー
 原作：ベルンハルト・シュリンク『朗
 読者』（新潮文庫刊）
 出演：ケイト・ウィンスレット/レ
 イフ・ファインズ/デヴィッ
 ド・クロス/レナ・オリン/
 ブルーノ・ガンツ/アレクサ
 ンドラ・マリア・ララ/ハン
 ナー・ヘルツシュブルング/
 ズザンネ・ロータ

👁️👁️ みどころ

アカデミー賞作品賞、監督賞は『スラムドッグ\$ミリオネア』にさらわれたが、主演女優賞はケイト・ウィンスレットが並み入る強豪(?)を抑えて念願の初ゲット！15歳の男の子との体当たりベッドシーンにはじまるハンナには、誰にも言えないある「秘密」が……。そのため、彼女には無期懲役の言渡など波瀾万丈の人生が。原題の『THE READER』の意味を噛みしめながら、『タイタニック』（97年）とは全く異質の、女優魂が炸裂する成長したケイトの魅力を存分に味わいたい。

主演女優賞受賞おめでとう！

第81回アカデミー賞は作品賞、監督賞、脚色賞など『スラムドッグ\$ミリオネア』（08年）が最多8部門を受賞して圧勝。『愛を読むひと』は作品賞、監督賞、主演女優賞、脚色賞、撮影賞にノミネートされていたが、主演女優賞以外の4部門はすべて『スラムドッグ\$ミリオネア』に完敗した。しかし主演女優賞だけは、アン・ハサウェイ（『レイチェルの結婚』）、アンジェリーナ・ジョリー（『チェンジリング』）、メリッサ・レオ（『フローズン・リバー』）、メリル・ストリープ（『ダウト - あるカトリック学校で - 』）の4人を制して、見事に本作でケイト・ウィンスレットが受賞。

『フローズン・リバー』（08年）だけまだ観ていない私は、本作を観るまではアンジェリーナ・ジョリーが最有力候補と思っていたが、たしかに本作のケイト・ウィンスレットの演技はすばらしい。『タイタニック』（97年）でみせたあの肉感的な魅力いっぱい若い若手女優が11年後にこんな成熟した女優に成長したのは立派だが、本作がすごいのは36

歳から66歳までの役をスリリングなストーリー展開の中で見事に演じ切ったこと。主演女優賞受賞おめでとう！

ダルドリーは、3作とも監督賞にノミネート！

1961年イギリス生まれのステューヴン・ダルドリー監督は本作が長編3作目だが、第1作『リトル・ダンサー』（00年）はアカデミー賞3部門、第2作『めぐりあう時間たち』（02年）はアカデミー賞9部門、そして本作はアカデミー賞5部門にノミネートされている。しかも監督賞ノミネートは、3作連続パーフェクトという実績の持ち主。また、主演女優にアカデミー賞主演女優賞をもたらしたのは、『めぐりあう時間たち』のニコール・キッドマンに続く、2度目という快挙。何ともすごい監督がいるものだ。

アカデミー最多13部門にノミネートされた『ベンジャミン・バトン 数奇な人生』（08年）は1918年から2003年までの年代の他、ブラッド・ピット演ずるベンジャミンとケイト・ブランシェット演ずるデージーの年齢を追っていくのが大変だった(?)が、本作でのハンナ・シュミッツ（ケイト・ウィンスレット）とマイケル・バーグ（レイフ・ファインズ/デヴィッド・クロス）の年齢差は21歳。また2人の最初の出会いはハンナが36歳、マイケルが15歳と設定されているから、その点は楽。しかし、ケイト・ウィンスレットの熱演は36歳から66歳まで続くうえ、1958年、1966年、1976年、1980年、1988年、1995年とある時代ごとに物語が組み立てられていくから、やはり頭の整理は必要。メモをとりながら観る必要はないが、この映画については鑑賞後パンフレットを読んで確認したり、自分の整理メモを作るくらいの作業をした方が、よりストーリー展開を納得できるのでは？

本作は、英語でも違和感なし！

本作はドイツの作家ベルンハルト・シュリンクが1995年に出版した自伝的要素を含む小説『朗読者』を原作としたものだから、当然登場人物はドイツ人だし舞台もドイツ。したがって、本来はドイツ人俳優がドイツ語で演ずるべき映画だが、本作はアメリカ・ドイツ映画として、英語をしゃべるイギリス人のケイト・ウィンスレットとレイフ・ファインズが共演し、青年時代だけはドイツ人のデヴィッド・クロスが出演し英語でしゃべっている。また、スイスとドイツを中心にヨーロッパで活躍しているブルーノ・ガンツは『ヒトラー～最期の12日間～』（04年）の印象が強烈だったため、ドイツ語をしゃべる俳優というイメージが強いが、彼も本作では英語。ちなみに、ケイト・ウィンスレット演ずるハンナ・シュミッツはドイツ語読みも英語読みも同じだが、レイフ・ファインズ演ずるマイケル・バーグは英語読みで、ドイツ語読みはミヒャエル・ベルグとなる。

このように考えると、デヴィッド・クロスやブルーノ・ガンツに英語を喋らせるのは本末転倒で、本来はケイト・ウィンスレットやレイフ・ファインズにドイツ語をしゃべらせ

るべきだが、やはり現実力は関係(資金力?)で決まるらしい。もっとも、『ワルキューレ』(08年)はすごい題材だったが、現実起きたヒトラー暗殺計画をドイツ人将校に扮したトム・クルーズが英語で演じ、「ハイル・ヒトラー！」だけドイツ語で叫ぶ(?)というのはどうしても違和感があった。それに比べれば、本作は英語でも違和感なし!

まずは、スケベおやし好みの描写から

アカデミー賞作品賞、監督賞、主演女優賞、脚色賞、撮影賞の計5部門にノミネートされ、ケイト・ウィンスレットが主演女優賞を受賞した本作は、まずはスケベおやし好みの描写から始まる。時代は1958年、舞台はドイツのある都市。マイケルは15歳の少年(青年?)、ハンナは路面電車の車掌をしている36歳の女性だ。

この映画を観ていると、男と女の出会いには実にいろいろなパターンがあるものだと実感!ハンナにしてみれば、学校帰りに身体の具合が悪くなったマイケルをちょっとした親切心から助けてやっただけだろうが、3カ月後にやっと猩紅熱から回復し、お礼の花束を持ってハンナの部屋を訪れてきたマイケルとの間に、なぜあんな状況が生まれたの?ハンナがマイケルに石炭を運んでくれと頼んだこと、慣れない作業をしたマイケルが煤だらけになったこと、そのためハンナが急いでマイケルを風呂に入れようとしたこと、には何の計算もなかったはず。しかし、その後のハンナの行動は・・・?36歳の男が15歳の少女にこんなことをしたらたちまち「御用!」だが、男と女の年齢が逆であればオーケー・・・?

また1度そんな事態になれば、次の日もその次の日もマイケルが放課後になると何をあいてもハンナの部屋に駆け込んできたのは当然だが、ハンナがそれを無条件に受け入れたのは一体なぜ?スケベおよじ的な観点から2人のヌード姿と激しいセックスシーンを鑑賞するのもしが、アカデミー賞主要5部門にノミネートされた本作冒頭のセックス描写は、原題の『THE READER』と対比しながら、その意味をじっくり考えなくちゃ・・・。

セックスの前に朗読を!

恋人間のセックスライフやセックススタイルはいろいろあるだろうが、「セックスの前に小説の朗読を!」とねだる女性は少ないはず。それまでは、部屋の中で出会うや否や言葉も交わさず激しく求めあっていたのに、ハンナがそんな依頼(要求?)をしてきたのは一体なぜ?また、若い(性欲の固まりのような?)マイケルがすんなりそれに応じたうえ、毎日いろいろな名作を持参してハンナに読んでやったのは一体なぜ?

この映画の邦題は『愛を読むひと』と何やら奥深い意味が込められているが、原作は『朗読者』だし、原題は『THE READER』と至ってシンプル。マイケルが読む小説は、マーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』からフランツ・カフカの『変身』、D・H・ロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』まで多種多様だが、マイケルの朗読を聞いているハンナはどれを聞いていてもホントに楽しそう。「そんなに小説が好きなら、自分で

も読めば・・・」とつい思ってしまうが、昼間は仕事で忙しいハンナにはそんな時間はなく、恋人(?)にベッドで読んでもらうのがベスト・・・?誰もがそんな風に思うはずだが・・・。

23歳のマイケルは23歳の私と同じ?

今日はマイケルの誕生日。クラスの友人たちやマイケルに好意をもってくれている女の子が企画してくれた誕生日パーティーを振り切って、ハンナの部屋に駆けつけてきたのに、今日のハンナの機嫌は最悪。それはなぜ?そんなことが16歳になったばかりのマイケルにわかるはずはない。さらに、次に訪れた時部屋の中は空っぽになっていたから、マイケルのショックは大。さて思いあたる節は?

映画とは便利な芸術で、それから一瞬で7年が経ってしまう。今23歳となったマイケルはハイデルベルグ大学の法科に入り、ロー教授(ブルーノ・ガンツ)の特別ゼミ生となっていた。私は23~25歳まで2年間司法修習を受けたから、実際の裁判傍聴から学ぶというロー教授のゼミで学んでいる23歳のマイケルは、23歳の時の私と同じようなもの?そんな個人的な興味はさておき、傍聴した裁判で、裁判長からの人定質問に対して「ハンナ・シュミッツ」と答えたのは、何とずっと想い続けてきた彼女だったからマイケルはビックリ。なぜ、ハンナが被告人席に?そして、彼女が問われている罪は?

あの戦争犯罪をいつまで引きずるの?

日本はA級、B級、C級戦犯についての東京裁判で、あの戦争犯罪のケリをつけ、1950年代の朝鮮特需、60年代の高度経済成長に結びつけた。しかし、ドイツでは戦後20年近く経過した1966年になっても、ナチ親衛隊の看守として収容所で働いていたハンナたちが戦争犯罪に問われ、裁判を受けていたからその姿に私はビックリ。ハンナたちが収容したユダヤ人を次々とアウシュビッツに送り込んだのは上からの命令に従っただけだが、「ある書類」によってその全責任をハンナが負わされることに。それに対するハンナの反論は可能だったはずだが、なぜかその反論をしなかったため、ハンナは無期懲役の極刑に。

そんな判決の言い渡しを受けて、ハンナはなぜそれを甘受しているの?裁判の一部始終を傍聴していたマイケルは、ここでやっとハンナが絶対に打ち明けようとしないう、「ある秘密」に気付いたが、さあそこでマイケルはどんな行動を?

それから10年

それから10年後の1977年、弁護士になったマイケルは私と同じように離婚を経験し、幼い娘とも別れ、今は再び1人で生活をしている。しかしハンナとどう向き合うのかというテーマは、何も解決しないままだった。そこで今マイケルが決意したのは、原点回

帰、すなわち15歳の時にしていた小説の朗読だ。

服役しているハンナに対してある日、マイケルが朗読したホメロスの『オデュッセイア』、チェーホフの『犬を連れて奥さん』などのテープが送られてきたから、ハンナはビックリ。テープの送り主はマイケル。ハンナがそう直感したのは当然だ。そしてまた、マイケルが今も私のことを想ってくれている。そんな確信がハンナに新たな生きる希望を与えたこともまちがいない。テープの前で名作の朗読を続けるマイケル。その思いを受けとめ続けるハンナ。そんな2人の関係はその後ずっと続いたが、刑務所の外では再びマイケルと会えないとわかっているハンナが、ある日刑務所の中で決意したことは？

時は1980年。ハンナは既に58歳になっていた。その決意の内容はここには絶対書けないから、あなた自身の目で……。

ドイツにも仮釈放の制度が

日本には仮釈放制度がある。つまり、模範囚として刑期の1/3～1/2をつとめれば仮釈放されるわけだが、当然ドイツにも同じような制度がある。朗読されたテープがドッサリとたまった1988年、つまりハンナが収監されて丸々20年。ハンナに予想もしなかった仮釈放が告げられた。

そこで問題は、身寄りのないハンナの受け入れ先、つまり住居と仕事。それが確保されなければ、ハンナの社会復帰の第一歩が踏み出せないことは明らかだ。そこで白羽の矢が立ったのがマイケル。今最もハンナに近い距離にいるのはマイケルだから。当然マイケルはそんな要請を受け入れ、ハンナと面会のうえ、部屋と仕事先を伝えた。弁護士として十分成功しているらしいマイケルの生活状態をみれば、それくらいの世話は何の負担でもなさそうだし、マイケルにとってはその世話をすることが喜びだったはず。また、20年前のあの裁判の時、自分がなぜもっと勇氣ある行動をとれなかったのか、という反省の気持ちもあったはずだ。

そして、今日は晴れて仮釈放の日。ところが、そこでマイケルが目の前に見たものは？

最後の舞台はニューヨーク、時代は1995年

本作の舞台はドイツだし、マイケルもハンナもドイツ人という設定。したがってアメリカのニューヨークには縁もゆかりもないはずだが、なぜか本作の最後の舞台はニューヨーク、そして時代は1995年。それは、1966年の「あの裁判」で収容されていたユダヤ人として証言台に立ったイラナ・メイザー（アレクサンドラ・マリア・ララ）をマイケルが訪れるため。なぜマイケルがああ証人を訪ねてわざわざドイツからニューヨークまで行くの？それもここでは絶対書けないが、1966年の裁判当時23歳だったマイケルも1995年の今は52歳。当然若かった証人のイラナ・メイザーも今は年をとっており、それを演ずる女優もレナ・オリンに変わっている（証言する娘を見守る母親ローズ・メイ

ザーと二役)

29年前の裁判で証言台に立ったコダヤ人女性と、その証言を傍聴席から固唾を呑んで見守っていた法科の若き学生が今ニューヨークではじめてご対面したわけだが、さてここではどんな会話が?もちろん、イラナ・メイザーにとってマイケルは全く縁もゆかりもなかった人間。そこで出されたマイケルからの提案に対して、イラナ・メイザーはどのような対応を?

アカデミー賞監督賞、作品賞、脚色賞、撮影賞を『スラムドッグ\$ミリオネア』にさらわれたのは仕方ない(?)が、ノミネートにふさわしい力作に拍手!ネタバレ厳禁だから、特に1980年以降の感動のドラマの詳細は書けなかったが、「ある秘密」とそれを軸とした大きな感動は是非あなた自身の目で。 2009(平成21)年3月14日記

第81回アカデミー賞をどう読み解く?

第81回アカデミー賞は第1章に掲載した5作品が作品賞と監督賞候補にピッタリ重なる事態になったが、これは史上5回目。この現象は、それほど候補作が充実していたことを示すものだ。事前予想では最多13部門候補の『ベンジャミン』が大本命だったが、結果的に『スラムドッグ』が作品賞・監督賞・脚色賞など最多8部門を受賞して圧勝。『ベンジャミン』は作品賞・監督賞の他、ブラッド・ピットが主演男優賞を、タラジ・P・ヘンソンが助演女優賞を逸し、結局美術賞・メイクアップ賞・視覚効果賞だけの受賞だったから、「ハリウッド」は完全に「ボリウッド」に席卷されたことになる。

他方、この5作品の中から『ミルク』のショーン・ペンが主演男優賞を、『愛を読むひと』のケイト・ウィンスレットが主演女優賞を受賞したから、作品の出来と主演男(女)優の熱演も正比例!シ

ョーン・ペンは大本命だった『レスラー』のミッキー・ロークを制しての勝利。同様に主演女優賞の大本命は、私の目には肉肉美で魅せる『トゥームレイダー』とは全く異質な、母の愛の強さを熱演した『チェンジリング』のアンジェリーナ・ジョリーだったが、豊富な肢体を披露した『タイタニック』(97年)以降も地道な精進を重ね、今や大人の演技派に成長したケイト・ウィンスレットに栄冠が。他方、助演男優賞は予想どおり『ダークナイト』のヒース・レジャーで決まり。助演女優賞は『ダウト』のエイミー・アダムスとヴィオラ・デヴィス、『レスラー』のマリサ・トメイ、『ベンジャミン』のタラジ・P・ヘンソンらを制して、『それでも恋するバルセロナ』のスペイン美女ペネロペ・クルスが受賞。やはり、審査員も美人には弱いということか?以上詳細は「巻頭雑感」で。

2009(平成21)年6月2日記